

# 運動が苦手でも 「運動やスポーツを楽しんでいる」 と感じている児童生徒が 多い学校の取組事例

ここでは、体力総合評価DE群でも「運動やスポーツを行って楽しいと感じたのは、どのようなときですか(複数回答可)」(質問2)において、平均より多くの項目を選んだ児童生徒が多い学校の取組を取材し、子供たちが楽しさを味わうことができる授業づくりのヒントとなる工夫やポイントについて紹介している。なお、掲載した事例校は、上記の特徴のほか、「運動・スポーツが苦手(嫌い)な傾向にある児童生徒向けの取組、または性別に応じた取組を現在行っていますか」(学校質問3)で「行っている」と回答し、「体育(保健体育)の授業で努力を要する児童生徒がいる場合に、どのような取組をしていますか(複数回答可)」(学校質問11)において5個以上の取組を行っていると回答した学校である。

「運動やスポーツを行って楽しいと感じたのは、どのようなときですか(複数回答可)」(質問2)の平均選択数(14項目中)

小学校

性別	総合評価	平均選択数
男子	児童全体	6.6
	AB群	7.5
	DE群	5.6
女子	児童全体	6.9
	AB群	7.6
	DE群	5.8
男女計	児童全体	6.8
	AB群	7.5
	DE群	5.7

中学校

性別	総合評価	平均選択数
男子	生徒全体	5.4
	AB群	6.2
	DE群	4.5
女子	生徒全体	6.1
	AB群	6.8
	DE群	4.4
男女計	生徒全体	5.8
	AB群	6.6
	DE群	4.5

# 運動の楽しさを味わわせ、 運動好きな児童を育てる

群馬県伊勢崎市立<sup>ひろせ</sup>広瀬小学校

## School Data

全校児童数	517名 (男子263名 女子254名)
全クラス数	22クラス (内特別支援級4クラス)
教職員数	50名
体力評価DE層の「運動が楽しいとき」平均選択数	9.6個 (全体平均5.7個)

## 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

体育の授業に対する児童の意欲に差が見られ、平成30年度に実施した児童への意識調査の結果、苦手な運動として挙げられた器械運動や長距離走、走り幅跳びなどについては、特に授業に対する意欲の差が見られた。

#### 2 取組の目的

- (1) 運動が苦手な児童にも運動の楽しさを味わわせ、生涯スポーツへ

運動が苦手な児童も運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動に親しめるよう、「関心・意欲を高める取組」や「運動量を確保する取組」などを体育の授業で実践し、運動が好きな児童の育成を目指した。

- (2) 自ら学ぶ意欲や主体性を育てる

場や用具の工夫、グループ活動の導入など、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の改善に努め、学校全体で体育の授業の質の向上を図ることとした。

## 取組の内容

### Do

#### 1 教科担当制の採用で質の高い授業を行う

- (1) 教師同士のスムーズな伝達で授業の質を高め合う

体育の授業で活用する指導資料を、体育主任を中心に各学年の体育部員で共有するとともに、体育部員から各学級担任にも情報を提供するなど、教師間の連携を密にした。また、4年生以上の学年においては、教科担任制を取り入れ、必要に応じてTT（ティームティーチング）による質の高い授業を展開した。

- (2) 課題解決に有効なデータなどを用意する

児童が課題解決のための活動に取り組む中で教師が助言する際には、科学的知見に基づいたデータや具体物を提示し、思考を深めながら課題の解決に取り組むよう工夫した。

#### 2 児童の「自己肯定感」を高める取組

- (1) 簡単にできる運動からスタートし、自己肯定感を持たせる

体育科の授業においては、児童の意欲を喚起するた

め、簡単に取り組める内容や興味・関心を高められるような内容を取り入れた。また、単元の導入においては、前学年の内容を取り入れるなどして、運動に意欲的に取り組めるようにした。

- (2) できたことを積極的に褒める

技能の向上はもとより、思考の深まりや発言、つぶやきといった児童の良さを教師が見つけ、積極的に称賛の声をかけるなど、児童が自信を持って楽しく活動できるよう配慮した。

- (3) グループ分けで児童が助け合う雰囲気をつくり、運動が苦手な子にも目を向ける

主運動のほか、準備運動や補助運動においてもペア学習やグループ活動を積極的に取り入れたことにより、児童同士が助け合ったりアドバイスし合ったりしながら活動できるようになり、運動が苦手な児童も意欲的に活動する姿が見られた。

#### 3 児童の「主体性」を育てる

- (1) 目当ては児童たちから引き出す

児童が主体的に活動に取り組むためには、児童一人一人が自身の目当てをしっかりと持つことが大切であると考え、授業の導入において学習カードなどを活用し、前時までの学習内容や自分の課題を確認させるなど、目当てを引き出す工夫を行った。

- (2) まずはやってみて、課題解決も児童に考えさせる

児童が思考を繰り返しながら課題解決に向け主体的に取り組めるよう、活動の場や教具などを準備し、課題に応じて選んで活動できるよう配慮した。

また、思考が深まるよう、まずは児童が考えた場や練習方法で取り組ませ、課題解決には何が必要かを考えさせることを心がけた。

## 取組成果の評価

### Check

- (1) 次時に活かす授業評価

授業の終わりには、学習の振り返りとして本時の目当ての達成状況を確認するとともに次時の目当てを示し、毎時間の授業が繋がるよう配慮した。

- (2) 学年末のアンケート

年度末には、児童の意識調査を行い、運動に対する

意識の変化や思いなどを把握し、授業の改善に活かせるようにしている。

今後の課題



さらなる取組の充実を目指して

教科指導の充実や休み時間などにおける外遊びの奨励など、体力の向上に向けた取組を実践しているところ

ろである。引き続き、家庭とも連携を図りながら、運動の機会を確保し、取組を継続していく。

また、県や市で作成している体育指導の事例集や準備運動プログラム集などを活用し、運動が好きな児童がさらに増えるよう、体育主任を中心に全校体制で取り組んでいく必要がある。

準備運動も楽しみながら



準備運動や補助運動も楽しみながら活動量が確保できるように工夫する

グループで意欲的に授業に参加



グループで互いに見合う状態をつくり、運動が苦手な児童も意欲的に授業に参加させる

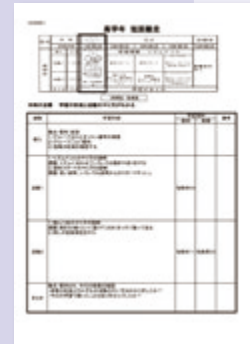


県や市のプログラムを活用



群馬県の事例集

県や市のプログラムを積極的に活用している。県のプログラムは、ウェブに公開されている



自主性を育てるために目当ては児童から引き出し、個人に合ったアドバイス

まずは自分で考えた方法で試してみる



課題を児童から引き出す



データや具体物を用いた分かりやすいアドバイス

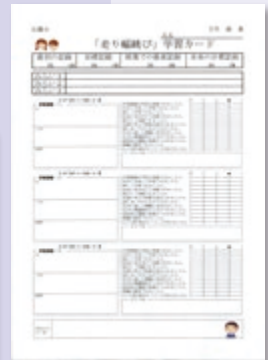


適切な助走距離の設定



着地姿勢に対する助言

「学習カード」を活用し、個人個人の目標を設定



学習カードを活用し、授業で何をすべきなのか理解させる。授業の最後には振り返りを行い、次の授業の目当ても示す

全校児童数	194名 (男子107名 女子87名)
全クラス数	9クラス (内特別支援級2クラス)
教職員数	18名
体力評価DE群の「運動が楽しいとき」平均選択数	9.5個 (全体平均5.7個)

# 主体的な課題発見と協働的学習で運動をより楽しく

## 愛知県豊橋市立老津おいっ小学校

### 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

全体的に運動が好きな児童が多いが、日常的に取り組んでいる種目の違いから経験に差があるため、誰もがどの運動でも意欲的に取り組むことができるようにする工夫が求められる。また、ほとんどの学年が単学級であり、その中での友人関係では、取り組む運動や遊びの内容が狭まってしまう傾向があることから、様々なグループでの活動や異学年交流の機会を設けることで、より多様な運動の楽しさを共有できるような取組を行っていくことが課題である。

#### 2 取組の目的

##### (1) 主体的な課題発見と協働的な学習活動を中心とした体育の授業の展開

定期的な振り返りや意見の出し合い、ICTの活用などを通して、児童が主体的に課題を発見する。さらに、解決方法を児童同士が提案し合い、グループで取り組むなど、協働的な活動を通して自ら課題を解決していく楽しさを味わう。

##### (2) 充実した運動時間を確保する学校全体の取組

体育の授業における単元や時間割の配置の工夫、異学年で運動遊びを行う環境づくりに取り組むことで、児童の運動時間の充実を図る。

### 取組の内容

### Do

#### 1 体育の授業の展開

##### (1) 主体的な目当ての設定

毎回、授業の開始時に前回の授業での課題を振り返り、その解決策を児童に発言させている。これにより、児童が主体的に自らの課題とその解決方法を考えている。その上で、今回の目当て、ねらいを各自が記入し、授業に取り組んでいる。

##### (2) ICTを使った主体的学習の促進

ICTによる動画再生機器を活用して、自分自身の動きを確認したり、運動動作の手本動画を活用したりすることで、自らの運動動作を把握し、よりよい動きを習得するための取組を工夫できるようにしている。

ICTの活用は、児童数が少ないことによるデメリットを解消し、児童同士の教え合いを促進している。

##### (3) グループ活動による課題の挑戦・解決

基礎的な練習メニューをグループごとにサーキット形式で実施するとともに、各練習メニューの成果を得点化することで、上達を確認できるように工夫している。これにより、飽きやマンネリ化を避けることができている。また、グループ単位で各練習メニューを行うことで、教え合いや応援、励ましが見られる。

#### 2 学校全体での取組

##### (1) 体育の授業の合理的な運営

体育の授業における運動時間の充実を図るため、体育主任を中心に単元や時間割の配置の工夫をしている。2019年度は、跳び箱を使った運動遊び・跳び箱運動の単元の実施時期を全学年で統一した。このことにより、学年間で系統的な指導を行うための教師間の情報交換が密になった。また、器械・器具の主な準備・片付けを高学年が担当するように時間割を配置することで、低学年や中学年の準備・片付けを少なくし、その分多く運動時間を確保できるようにした。

##### (2) 縦割りグループによる日々の活動

掃除などの日々の活動において縦割りを導入することで、異学年との交流の機会を設けている。また、縦割りグループによる遊び時間を設定することで、より多くの運動遊びや動きの体験、実施が可能になっている。

### 取組成果の評価

### Check

##### (1) 授業の内容の振り返りと課題確認

授業の終盤に、課題とした内容の確認と上手にできたときのポイントを出し合い、学級全体で確認を行っている。その際、できたことを児童が実演したり、なぜ上手にできたかを考えて周りに伝えたりすることで、児童の挑戦心が高まり、次回への課題が明確になるようにしている。その上で最後に、振り返りと次回への課題を記入させているため、次回に向けても主体的な課題発見ができている。

(2) 体育の授業における活動の充実

単元や時間割の配置の工夫による体育の授業での運動時間の確保によって、特に低学年の児童は、運動遊びへの意欲を向上させるとともに、少なくなった準備・片付けにもより熱心に取り組むようになった。動作が顕著に発達する時期にある低・中学年の児童において、運動に取り組む時間を確保することは大変効果的であり、体育の授業の楽しさも倍増した。

また、縦割りグループでの活動を通して、下級生には、上級生へのあこがれや挑戦心などが獲得され、体育の授業においても意欲の向上が見られた。一方、上

級生は、下級生に教えるという経験を活かし、体育の授業の中での豊かな教え合いを促進している。

今後の課題

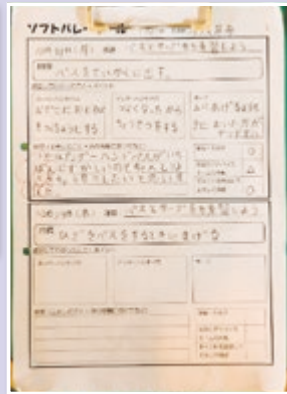


ほとんどの学年が単学級である現状で、学年内の教師と情報交換などを行うことは難しい。そのため、各年度に実施した内容やノウハウ、達成状況などを共有していける仕組みづくりが課題である。これによって、教育の連続性を確保でき、運動が好きな児童が多いという本校の強みを活かした体育の授業や体力の向上の取組を効果的に推進していく。

前回の授業の振り返りのあとに各自が主体的に目当てを記入



授業の最初に前回の課題を振り返り、解決策を児童に発言させることで主体的に自らの課題とその解決方法を考えさせる。その上で今回の目当て、ねらいを記入させている



ポイントの意見の出し合い



上手にできたポイントを児童が意見し合い、次の練習につなげる

サーキット形式など飽きさせない授業の工夫



サーキット形式の練習で飽きやマンネリ化を回避。教え合いや応援、励ましも見られる

ICTを使った主体的な学習



動画再生機器を活用して、自分自身の動きを確認。運動動作の手本動画も活用している



縦割りの活動設定



異学年との交流を増加させることで、教え合いや多様な運動、遊びの機会を創造した



# 児童の主体性を核に 運動好きを育て体力の向上を図る

す ざく だいしち  
京都府京都市立朱雀第七小学校

## School Data

全校児童数	245名 (男子131名 女子114名)
全クラス数	12クラス (内特別支援級1クラス)
教職員数	23名
体力評価DE群の「運動が楽しいとき」平均選択数	9.1個 (全体平均5.7個)

## 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

(1) 体力テストの結果に低下の傾向が見られた  
平成29年度の結果は全国平均を下回っていたが、平成30年度の結果はより低い結果となった。

(2) 外遊びの内容に固定化が見られた

中休みや昼休みに実施される遊びの内容が、ドッジボールや固定遊具での遊びなど固定化されており、多様な動きの経験が十分とは言えなかった。

#### 2 取組の目的

(1) 主体性を核に運動遊びの実践を広げ、体力の向上を図る

特別活動で運動遊びを活用し、委員会がイベントを開いたり、異学年との縦割りで遊びをしたりすることとした。その際、企画そのものや運動遊びの内容を児童中心で決定させ、主体的な取組を促した。

(2) 目当てをもって挑戦する体育授業で体力の向上を図る

教師が提示した学習内容を受動的に行うのではなく、児童一人一人が目当てをもち、挑戦することで、意欲的な学習となるようにした。

## 取組の内容

### Do

#### 1 体力テストの結果を教師研修に活用

(1) 教師間での現状把握

職員会議で体力テストの結果を議題にした。全教師で体力テストの結果が全国平均を大きく下回っていることを認識し、現状を改善する必要性を確認した。

(2) 京都市教育委員会が作成した資料の活用

京都市教育委員会が作成した「運動遊びハンドブック」には、様々な内容が紹介されている。職員で小グループをつくり、体力の現状や発達段階に合わせてどの運動遊びを実施すべきかを検討し、実施した。

#### 2 児童の主体性を核にした特別活動

児童が企画したイベントで運動遊びを実施

代表委員会で「ハッピーにこにこパーティ」を企画・提案した。1・6年生、3・5年生、2・4年生がペア学

年となり、上級生が運動遊びの内容を決定、イベントの運営も行った。その際、「運動遊びハンドブック」を活用した。

年度によってイベントの内容は異なり、平成29年度は大なわ大会を実施した。休み時間に練習するなど盛り上がり、児童主体で運動習慣が広がった。

#### 3 苦手な児童の身体活動量を保障する取組

(1) 苦手な児童も挑戦したくなる空間づくり

通級指導教室には、低鉄棒やバランスボール、トランポリンが常設されている。休み時間、運動が苦手な児童を教師が誘い、鉄棒の練習をしたり、トランポリンで遊んだりして体幹を鍛えた。利用希望者が自主的に参加することも認め、場を積極的に活用した。

(2) 自分で選択可能な持久走の取組

京都市では駅伝大会が盛んなため、年間通して6年生全員が早朝に持久走を実施している。今年度は児童の走能力、持久力に応じて、走る距離やスピードを選択できるようにした。そのため、意欲的に走る児童が増加した。

#### 4 目当てを大切に体育授業

(1) 目当てを明確に持つ

学習カードに45分後になりたい自分の姿を記入した。授業の導入時には、教師が数名に発言させ、目当てをもっているか確認した。その際、漠然とした目当てではなく、例えば「側方倒立回転をつま先まで伸ばしてやりたい。そのために〇〇の場で練習する」など具体的な目当てを持たせており、これは全学年で継続して実施している。

(2) 個に応じた場の設置で何度も挑戦する

目当てを達成するための多様な場、苦手な児童も挑戦しやすい易しい場を設定した。技術ポイントが示されたカードを技別の場に設置し、何度も挑戦できるように時間を確保した。

(3) 仲間に優しい学習集団

毎月1日は人権「こころの日」である。その日を契機として「人には優しく接する」ことの大切さを日常的に指導している。そのため、苦手な児童が目当てを達成できるように優しく、粘り強く関わる姿が多い。

**取組成果の評価** **Check**

(1) ペア学年での手紙交換

イベント後にはペア学年で手紙の交換をしている。低学年が高学年に、高学年が低学年にイベントの感想を伝え合い、高学年は次のイベントに活かしている。

(2) 学習カードの活用

目当てを学習カードで振り返った。その内容を教師が確認して次時の指導内容の検討や方向づけに活用した。

(3) 体力テストの結果の再確認

1年間の取組がどうであったか、体力テストの結果を踏まえて振り返り、その後の活動に活かしている。

**今後の課題** **Action**

教師の成長が児童を育てる

現在実施している様々な取組が、次の体力テストの結果や児童の意識の変容にどう影響しているかを分析し、よりよい取組を創造していく必要がある。また、若手教師は、運動遊びが児童を育むことの重要性の認識が薄く、運動遊びのレパートリーが不足しているため、その活用が不十分である。「運動遊びハンドブック」などをさらに活用して、運動遊びに関する研修会を実施し、児童とともに運動遊びを楽しむ資質を教師に育む。

京都市教育委員会作成の「運動遊びハンドブック」を活用



児童が主体的に企画して楽しく遊ぶ

「ハッピーにここにパーティ」は児童の手作り



運動が苦手な児童でも挑戦したくなる空間づくり



自主参加の通級指導教室での体幹トレーニングの様子

児童の目当てや教え合いを大切にした体育授業

教え合い

目当ての決定



個人の目当てに応じた多様な場の準備



# 運動する場・機会・仲間が 運動に引き寄せる

北海道札幌市立<sup>まえだ</sup>前田小学校

## School Data

全校児童数	300名 (男子170名 女子130名)
全クラス数	14クラス (内特別支援級2クラス)
教職員数	26名
体力評価DE群の「運動が楽しいとき」平均選択数	9.6個 (全体平均5.7個)

## 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

教育活動全般における運動量が少ない

異学年活動「キラメキなわとび」の取組などを通して、運動に対する挑戦意欲の向上は見られた。しかし、シャトルランフェスタの結果を見ても学校全体で児童の体力が向上したとは言いがたかった。教育活動全般における運動量が総じて少ないことが課題と考えた。

#### 2 取組の目的

体を動かすことに喜びを感じ、仲間と豊かに関わり合いながら運動を楽しむ児童たちであってほしいという願いのもと、以下の取組を重点項目とした。

- (1) 健やかな体づくりへの意欲と体力の向上
- (2) 心身の健康の保持増進に向けた意欲の向上とバランスのよい成長を支える環境づくり

## 取組の内容

#### 1 「全員遊び」で自主性を育む

- (1) 学校全体で遊びの場を確保・整備

グラウンドや体育館に、「遊びに飛び出したいくなる」「休み時間が待ち遠しくなる」常設の運動コーナーを設置した。

「遊びプロジェクト」メンバーの教師が中心となって、二重跳び練習用のジャンピングボードなどの用具づくりや場づくりに当たるだけでなく、気付いたら誰でもラインを引き直せるように目印を付けるなど、学校全体で取り組める工夫をした。

- (2) 学級全員で遊び、運動に消極的な児童をケアする環境づくり

教室にいることの多い児童は担任が率先して遊びに誘い、自分たちで遊べる児童を育てることを意図して、週に1度は全員遊びを取り入れ、様々な遊びを教えた。

#### 2 個に応じた学習の場と仲間と活動する楽しさが活動を促す体育の授業

課題に応じた学習の場をつくり児童が選択

課題に応じた様々な学習の場をつくり、児童が自由に選択できるようにしている。同じ学習課題でも練習

場所を多く設けることで、短時間に繰り返し練習することができる。教師は、技能に自信のない児童が集まりやすい場に付いて丁寧に指導し、次の学習段階の場に移るよう促している。

教師がクラス全体に技能のポイントを明確に伝えた後は、それぞれの練習の場で児童に自主的に活動させている。練習の場には、集団遊びのように一緒に活動を楽しんでいる活気があり、活動がうまくいかずに一時的に停滞してしまう児童がいても、すぐに楽しそうに活動している仲間の輪に戻ってくる。

#### 3 「運動」を「生活」と「学習」の面からも考える

- (1) 「生活」「食」「保健」に関する指導を関連付ける

全校的なあいさつの取組を推進することで心のつながりを促し、運動や健康の促進に不可欠な「豊かに関わる仲間」づくりを推進した。

栄養教諭主導の食指導を推進することで、食べることや食べる量についての意識を高めた。また、札幌市教育委員会の「さっぽろっ子『学び』のススメ」を活用し、運動・食事・基本的な生活習慣の定着に向けた家庭への啓発を行うなど、学校・家庭・地域が一体となって児童の「運動・生活習慣づくり」を推進した。

- (2) 総合的な学習の時間と国語の授業で体力・運動能力の向上のための課題解決学習

「チャレンジ！ パワーアップ」をテーマに、総合的な学習の時間で、体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から課題を見付け、インターネットや図書館で解決方法を調べて実践し、2回目の計測結果を基に実践した結果とこれからの自分の生活の改善について考えた。また、調べた情報をまとめて整理する国語の授業の中でレポートを書いた。総合的な学習の時間や国語の授業と関連付けることで、長期間にわたって体力・運動能力の課題を意識して取り組むことができた。

## 取組成果の評価

### Check

- (1) 記録の向上

全国体力テストの調査結果でもシャトルランの記録が向上しており、成果が見られた。



(2) 遊びの広がり

休み時間の「遊びプロジェクト」の取組を通じて、遊びの内容が広がった。また、放課後も自分たちで遊ぶ児童が増えてきた。

(3) 定着

なわ跳びを準備体操などに取り入れる学年が増え、なわ跳びの継続・習慣化につながりつつある。

(4) 運動が苦手な児童の活動量の増加

体育の学習の中で個に応じた場の設定を大切にすることで、運動が苦手な児童も達成感を味わうことができるようになり、授業における活動量が増えた。

今後の課題



(1) 体育の学習の質の向上

体育の学習や遊び、日常生活が結び付き、相互作用で運動の活動量全体は上がってきている。これからは、その中核である体育の学習の質の向上が大切であると考える。

(2) 外で遊ぶ児童をさらに増やす

外で遊ぶ児童をさらに増やしていく手立て・関わりが必要である。その際に、児童とともに活動内容を考えることで自主性を育み、日常的に運動に触れる時間を増やすことで、習慣化につなげていきたい。

## 遊び場の設定や異学年活動で運動への意欲を向上

遊びプロジェクト



グラウンドや体育館に常設の運動コーナーを設け、学校全体で「遊び」を促進



キラメキなわとび

みんなでキラメキ

「なわとび」や「しっぽとり」などの異学年活動を通し、運動への意欲が向上



キラメキしっぽとり

## 体育の授業は個に応じた学習の場を用意



個に応じた場の設定



課題に応じた様々な学習の場をつくり、児童が自由に選択できる



児童同士で助け合う



見学の児童にも役割を与え、助け合う環境をつくる

## 運動を「生活」や「学習」から考える取組を促進

食育



栄養教諭主導による食育を行い、食べることや食べる量についての意識を高めた

学習との関連付け



体力に関する課題を調べ実践した様子をレポートにし、国語の授業で発表した

# 仲間とともに運動やスポーツの楽しさを学ぶ

三重県三重郡川越町立川越中学校

## School Data

全校生徒数	398名 (男子201名 女子197名)
全クラス数	14クラス (内特別支援級2クラス)
教職員数	27名
体力評価DE群の「運動が楽しいとき」平均選択数	8.1個 (全体平均4.5個)

## 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果によると、2年生全体の体力・運動能力は男女ともに全国平均より高いものの、総合評価DE群の生徒が2割程度いるのが現状である。

総合評価DE群とされる生徒たちが、授業の中でどのように運動やスポーツを楽しみ、体力の向上に結び付けられるかが課題である。

#### 2 取組の目的

##### (1) 仲間との教え合いを通じた授業づくり

学級単位での男女共習授業を行い、グループ活動の中での教え合いを通して、仲間と助け合いながら、粘り強く取り組めるようにする。

##### (2) 全ての生徒が安全・安心に楽しく取り組むことができる授業づくり

自己や仲間の体調を把握すること、ルールやマナーを守ること、自分に合った練習方法や場があること、仲間の頑張りを認め、応援する雰囲気を大切にすることなどを通して、全ての生徒が安全に、安心して楽しく取り組めるようにする。

## 取組の内容

### Do

#### 1 グループ活動を通じた指導の工夫

体力や技能の程度、性別の違いなどに配慮したグループ（男女混合や総合評価DE群とされる生徒を各グループに配置する等）を編成するようにし、グループ活動の中で、一人一人の違いの理解や助け合う気持ちを育むことができるようにしている。

#### 2 「学習カード」を活用した指導の工夫

##### (1) 単元のねらいや単元の見通しを明示

単元の最初の授業では、オリエンテーションを行い、単元のねらい（身に付けたい力）や単元の流れを示し、生徒が単元における授業の見通しをもてるようにしている。

##### (2) 単元で学習する知識の明確化

運動の特性や成り立ちなどの知識の学習を通して、領域ごとの運動の楽しさを理解できるようにしている。

##### (3) 「運動の行い方」を視覚化

運動の行い方を視覚化するとともに、各運動の一連の動きがどの程度達成できているかを仲間にチェックしてもらい、出来映えや課題を確認できるようにしている。

##### (4) 「生徒の気付き」の共有

学習カードに記述している「生徒の気付き」などをクラス全体場で伝え、仲間の考えを共有することで、課題発見や課題解決につなげられるようにしている。

##### (5) 本時の振り返り

毎時間の授業の中で工夫したことや気付いたこと、課題などを振り返られるようにしている。

#### 3 仲間との助け合いや話し合う活動の工夫

##### (1) 仲間と助け合う活動（例：器械運動、陸上競技）

グループ活動を通して自己や仲間の課題解決に向けた練習をする中で、技や運動の行い方のそれぞれのポイントに対する出来映えをグループで確認し合い、仲間の頑張りを認めたり、励ましたりする声かけや仲間へのアドバイスをを行った。

##### (2) 仲間と話し合う活動（例：球技、ゴール型）

自己やチームの課題を発見し、解決するなどの話し合いの場面において、話し合う内容を明確にし、全ての生徒が意見を出すことができる内容にすることに留意した。

#### 4 全ての生徒が安全・安心に楽しく取り組むことができるよう、自己の体力や技能に合った練習や場を選べる工夫

##### (1) 陸上競技（ハードル走）

インターバルを「6.5m」「7m」、ハードルの高さを2段階に設定するなどして、個々の走力や技能に応じて選択できるようにした。

##### (2) 器械運動（マット運動）

ロングマットを使用するとともに、武道で使用している投げ込みマットを活用した場を設定したり、跳び前転を練習する場ではフラフープの輪の中を飛び越え

るコースをつくったりして、個に応じた練習方法や場の工夫をした。

(3) 球技：ゴール型（バスケットボール）

授業の始めに、仲間と楽しく行うことができる練習を自分のペースで行ったり、チャレンジしたりできるようにした。

取組成果の評価

Check

単元ごとの学習カードを活用して、授業の見通しや運動の行い方を視覚化したり、自己の記録や思考したことを記述したりすることで、学習した経過を振り返りながら自己の習得度を確認する姿が見られた。

グループ編成を工夫し、一人一人の違いを理解する

指導をしたことで、仲間のことを応援したり、教え合ったりするような姿が見られた。また、話し合いの場面では、運動が苦手な生徒も安心して自分の意見を伝える場面が見られた。

今後の課題

Action

義務教育終了段階において、多くの生徒が保健体育の授業を通して運動やスポーツの楽しさを味わうことができているように感じている。

今後は、運動やスポーツへの多様な関わり方や楽しみ方などの指導方法の工夫改善を図り、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」につなげられるようにしていきたい。

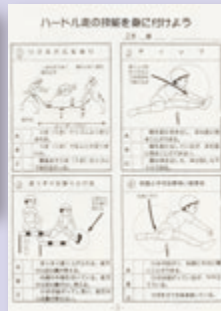
「学習カード」を活用した指導

単元ごとに学習カードを用意して運動の行い方を視覚化

授業の工夫や課題を振り返る

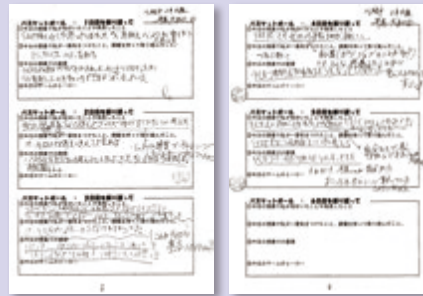


マット運動



ハードル走

運動の特性や成り立ちなどの知識を学ぶことで、領域ごとの運動の楽しさを理解できるようにしている



学習カードで毎時間の授業での課題や気づきを振り返られるようにしている



「生徒の気づき」をクラス全体に共有して、課題の発見や解決につなげる

仲間との話し合いや楽しく取り組める授業の工夫

前回の振り返りと主体的な目当ての設定

話し合う活動



目当てを設定することで、仲間との話し合いの中で話し合う内容が明確になり、全ての生徒が意見を出しやすくなる



仲間と話し合いながら、自分やチームの課題を発見し、解決へ導く

全ての生徒が楽しく取り組める工夫

バスケットボールでは、仲間と楽しく行うことができる練習を取り入れた



# 運動が苦手な生徒が 意欲的に取り組める授業の工夫

和歌山県有田市立箕島中学校

## School Data

全校生徒数	287名 (男子152名 女子135名)
全クラス数	12クラス (内特別支援級2クラス)
教職員数	29名
体力評価DE群の「運動が楽しいとき」平均選択数	8.0個 (全体平均4.5個)

## 取組時の課題と目的

### Plan

#### 1 取組時の課題

運動が苦手な生徒へのアプローチ

本校は、歴史的にスポーツが盛んな地域に位置し、特に柔道、剣道をはじめとする武道や野球については、地域との連携による積極的な取組が行われている。部活動に加入する生徒の割合は全校で90%を超え、生徒は日常的に運動・スポーツに親しむことのできる環境にある。今年度の新体力テストの結果を見ると、特に女子は72.5%が総合評価AB群になるなど、体力面での成果も認められる。

しかし、男女ともに約15%の生徒が新体力テストの総合評価がDE群となっていた。これらの生徒の大半が運動に対して消極的な態度を示していたことから、運動が苦手な生徒も意欲的に取り組むことのできる体育授業づくりの取組が始まった。

#### 2 取組の目的

運動が苦手な生徒や新体力テストでDE群に属する生徒が減少し、全ての生徒が運動好きになること、運動習慣が身に付くことを目的に、以下の取組を行った。

(1) 運動が苦手な生徒が積極的に参加できる学習過程の確立

運動が苦手な生徒が、運動に興味・関心をもち、意欲的に取り組むことのできる体育授業のサイクルを定着させ、全ての生徒が運動好きになることを目指す。

(2) 全員が役割と課題意識をもって取り組むことのできる教材づくり・活動づくり

運動が苦手な生徒も意欲的に運動に取り組むことができるよう、個に応じた運動の機会を持つことができる教材・活動の工夫をする。

## 取組の内容

### Do

#### 1 「聴く→分かる→できる→楽しい」のサイクルを大切に した学習過程

運動が「できる」ことのみを追求するのではなく、「分かる」ことも大切にして生徒の学習の深まりを導くことにした。そのために

聴く → 分かる → できる → 楽しい

という学びのサイクル（学習過程）をつくって実践を行った。このことで、理解と達成が、より大きな運動の楽しさと意欲を生み出すと考えた。

そのために、授業の導入部分では、視覚的に分かりやすい掲示物を用意して、生徒一人一人に本時の課題や学びの見通しを持たせるようにしている。

#### 2 運動が苦手な生徒も積極的に取り組むことのできる 活動の工夫

球技のゲームでは人数を減らしたり、ルールを話し合っ決めてたりするなど、簡易化したゲームを取り入れて、運動が苦手な生徒も意欲的に取り組むことができるよう工夫した。また、動きのポイントが視覚的に分かりやすくなるような教具の工夫も積極的に行われた。

種目や学びの流れに応じて、男女共習の授業展開も日常的に実施している。

#### 3 全員に役割を持たせる学びの定着

全ての生徒が活動に参加し、良質な学びを得ることができるよう、「学び合いマスター」「ゲーム記録・分析係」など、全員に役割を持たせて、それぞれの視点で学習に取り組むことができるよう配慮した。

## 取組成果の評価

### Check

本取組の成果として、本取組で設定した学習過程が定着し、運動が苦手な生徒を中心に、運動に対する姿勢の面で成果が見られ、生徒の運動実施時間も全国平均を上回るようになっている。また本取組を通して、教師間のコミュニケーションも活発になり、生徒の様子について情報共有する機会も増えている。

## 今後の課題

### Action

各領域、各単元における、より生徒の実態に適した教材・活動づくりを進めることによって、より豊かに「伝え合う力」、生徒の運動に対する態度の向上、体力レベルの維持向上を継続することが今後の課題である。

「聴く→分かる→できる→楽しい」の  
学びのサイクル



「聴く」

本時の課題や自己の目当てを確かめる



「分かる」

仲間と課題解決について話し合い、  
イメージする



「楽しい!」

「分かってできる」学習はとても楽しく、  
次への意欲もさらに高まる



「できる」

イメージした動きができる・課題達成  
できるように主体的に取り組む



運動が苦手な生徒も意欲的に  
取り組める授業の工夫

簡易化された教材づくり  
課題が見えやすい教具の工夫



個に応じたルール  
の工夫



ポイントが明確になる  
教具の工夫

全員に役割を持たせる  
学びの仕組み



ゲーム記録係  
分析結果から次の課題を  
探る



コーチ係  
仲間を励まし、  
アドバイスする

スポーツが盛んな  
地域の風土

積極的な  
運動部活動